

思春期における自己概念と自尊感情との関連

筑波大学大学院（博）心理学研究科 山本 淳子

筑波大学心理学系 田上不二夫

The relation between self-concept and self-esteem in adolescents

Junko Yamamoto and Fujio Tagami (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Discrepancies between the real-self and the ideal-self are associated with psychological adjustment (Rogers, 1951). The purpose of this study is to reexamine the nature of self-concept in adolescents, and to identify the self-concepts that support self-esteem. The respondents in this study were 5th to 12th grade students, and two new scales were constructed to measure self-concept in the 5th to 9th grades and in the 10th to 12th grades, respectively. These scales were used firstly to identify whether traits are considered to be positive or negative and secondly to investigate the relations between self-concepts and self-esteem. The major findings of this study are follows: 1) A statistically significant correlation was found between self-esteem and personalized scores for self-concepts. When considering adolescents, it is necessary to consider what self-concepts are important for the individual. 2) Discrepancies between real-self and ideal-self in positive self-concepts regarded as important had greater influence on self-esteem than discrepancies in negative self-concepts regarded as important and than discrepancies in positive-negative self-concepts not regarded as important for 5th to 6th grades and for 10th to 12th grades. However, for 7th to 9th grade, discrepancies in negative self-concepts regarded as important had greater influence on self-esteem than other discrepancies. 3) Every grade showed a common tendency for students with low self-esteem to have more discrepancies in self-concepts that they regard as important. These findings suggest the need to identify what self-concepts are desirable and important to the individual and to provide them with the means of reducing such discrepancies.

Key words: self-concept, self-esteem, adolescents

問題と目的

従来から、人が自己をどのように認知しているかと適応との関連について、様々な研究がなされてきた。Rogers (1951)によれば、「現実自己」が「理想自己」との間に大きな差異をもって認識されるとき、その個人は自己肯定的でなく、内的な不適応感を抱いているという。このRogersの仮説をめぐって、成人だけでなく、子どもたちを対象にした研究もなされてきた。

渡邊・長谷川 (1972) は、一般の中学生と不登校生徒の自己概念を比較し、不登校生徒の現実自己像が一般の中学生に比べ内閉的・神経症的傾向であることを明らかにした。この研究では、一般の中学生と不登校生徒の抱く理想自己像の内容が類似していることも示されており、渡邊・長谷川 (1972) は、それをもってRogersの考えを検証したと述べている。これに対してHoge & McCarthy (1983) は、思春期の子どもの理想自己は、現実自己の高低とは比較的無関係でステレオタイプのであり、また現実一

理想自己の差異は変化しやすいため、ズレの大きさは不適応の指標としては意味をなさない指摘している。また、徳田(1961)の小学校5年生から中学校3年生を対象とした研究では、「現実自己」と「理想自己」とのズレが中程度である子どもが、他の子どもより適応的であることが明らかにされている。Block & Thomas (1955)の成人を対象とした研究でも、対象が56名と少数であるものの、同様の関係が見出されており、両自己間のズレと適応との関係はRogersの言うよりもっと複雑な関係にあるとも考えられる。

ところで、従来の自己概念研究における問題のひとつは、自己概念の質的側面、すなわち「ある特性に関する個人にとっての重要性の違い」を考慮してこなかったことである(遠藤, 1991)。Moretti & Higgins (1990)は、現実自己と理想自己との間の差異と自尊感情との関係を、「法則定立的方法」と「個性記述的方法」の2つの方法で検討し、「個性記述的方法」によって算出された差異得点のみが自尊感情と有意な関連を示すことを明らかにした。また遠藤(1992a)も、適応と自己概念との関連を検討する際に個性記述の要素を取り入れた方法を用いており、Moretti & Higgins (1990)を支持する結果を得ている。こうした自己概念の質的側面を重視する研究に関しては、論理的には十分妥当なものと考えられている(榎本, 1998)。

思春期は、自己の弱さや未熟さを抱えながらも、自分で考え、自分で感じたことに従って、自分の行動や人生を決めていきたいという欲求を持ち始める時期である(高垣, 1999)。それを考えれば、思春期にある子どもたちだからこそ、自分が何に価値をおくのか—すなわち「個人にとっての重要性」が、適応との関連で大きな意味を持つてくるのではないだろうか。つまり、自分にとって価値ある特性で自分を認められることが、自尊感情の高さに結びつくのではないかと考えられる。

さらに、自己概念の質的側面をより詳細に示すものとしては、遠藤(1987)が提起した「そうなりたくない自己像」が挙げられる。個人が「持ちたい、維持したい」と考えるようなポジティブな特性だけでなく、「持つことを避けたい」と思うようなネガティブな特性についても、別個に評定を求めべきであるとの提案である。ポジティブな特性語とネガティブな特性語の両方を用いることは、単に測定の範囲を広げることにとどまらず、自己肯定に関する積極性の違いを記述することを可能にする(桑原, 1991)。大学生を対象にした研究では、ネガティブ領域におけるズレの大きさが自尊感情との関わりが

強いこと、つまり「なりたくない自己になっているか」よりも、「なりたくない自分にかかっているか」が自尊感情の強い支えになり得ることが示され、それは日本人の否定的側面についての意識が強いという特徴と符合するものと論じられている(遠藤, 1992b)。

では、こうした消極的な自己肯定の傾向は、思春期に突入していく十代はじめの段階で、すでに認められるものなのだろうか。この疑問について考えるためには、まず、思春期の子どもたちにとって、一体どんな特性が「ポジティブ」あるいは「ネガティブ」であるのか、それを明らかにする必要がある。小学生や中学生を対象に自己概念を測定する尺度はいくつか作成されているが(加藤・高木, 1980; 長島・藤原・原野, 斎藤, 堀, 1967)、これらの尺度を構成する特性語は、一般にそれが望ましいものか否かについて、研究者や教師が判断するという方法で選出されている。しかし、子どもが望ましいと感じる特性と、大人が望ましいと感じる特性は果たして同じなのだろうか。また、子どもをとりまく社会の、時代の変遷に伴う価値観の変容が、望ましさの方向性に影響を及ぼしていることも予測される。21世紀を生きる現代の子どもが、自己をどのような言葉であらわすのか、またどのように「なりたくない」あるいは「なりたくない」と思っているのかについて、改めて問い直す必要があるだろう。

そこで本研究では、小学校5年生から高校3年生までを対象に、以下の四点について検討することを目的とする。第一の目的は、自己概念尺度を作成することである。現代の子どもが自己を表現するのに用いる特性語から構成され、ポジティブ(以下P)であるかネガティブ(以下N)であるかの方向付けを子どもに委ねた、P・Nの各側面をそれぞれ測定できる新たな尺度の作成を試みる。また、作成した尺度について、その因子構造の分析を行う。第二に、子どもを対象として自己概念を得点化する場合、個人にとっての重要性を考慮することが、自尊感情との関連において有意味であるか否かについて検討を行う。第三に、消極的自己肯定が積極的自己肯定よりも自尊感情に大きな影響を及ぼすという傾向が、より低年齢の対象の場合にも同様にみられるかについて検討する。そして最後に、現実自己—理想自己間のズレの大きさと自尊感情との関連について、総合的に検討を行う。

【研究1】

1. 目的

小・中学生用自己概念尺度および高校生用自己概念尺度を作成する。

2. 方法

自己概念に関する項目を収集するため、2000年7～10月、小学校5年生から高校3年生の男女児童・生徒871名（Table 1）を対象に、文章完成法を用いて回答を求めた。質問文は「私のよいところは○○ところです」「自分の気に入らないところは、○○ところです」など6つの文章からなる。

3. 結果と考察

1) 自己概念尺度項目の整理と検討

それぞれの質問文に対して、小学生、中学生の回答から230項目、高校生の回答から360項目が得られた。その後、長島他（1967）の項目選定基準を参考に、以下の6つの観点から整理・分類を行った。

- ① P領域に属する項目の整理・検討を行った結果、小・中学生の回答は118個、高校生では172個であった。その内容と出現頻度については、Table 2-1、2-2に示すとおりである。
 - ② N領域に属する項目の整理・検討を行った結果、小・中学生の回答は110個、高校生では188個であった。その内容と出現頻度については、Table 2-3、2-4に示すとおりである。
 - ③ 両価的な項目（P・N両方に含まれる項目）を削除した。Table 2-1～2-4で、項目番号の右に△印のある特性語が両価的な項目である。
 - ④ 内容が類似している項目がいくつかみられた。それらに関しては、より適切な項目を選択した。
 - ⑤ 特殊な項目・固有名詞（「お父さん」、「先生」、「不良」等）を削除した。
 - ⑥ 出現頻度の多い項目を採用した。Table 2-1～2-4に◎のある特性語が採用した項目である。
- 以上の観点から項目の分類・検討を行った結果、

Table 1 調査対象児童生徒の学年別、男女別構成

	小学生		中学生			高校生			計
	5年	6年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	
男子	42	44	55	38	61	145	21	25	431
女子	39	41	52	40	70	109	37	52	440
計	81	85	107	78	131	254	58	77	871

P・N各領域に含まれる項目として、小・中学生の回答から15項目ずつ、また高校生の回答からは12項目ずつが選出された。各領域に含まれる項目をランダムに配置して5段階評定用にしたものを、暫定的に自己概念尺度とした。

2) 文章完成法の反応内容について

小・中学生の反応内容では、個人の情動的特徴や身体的特徴等に関する語（「明るい」「かっこいい」など）だけでなく、能力（「スポーツが得意」「頭がいい」）や対人的特徴に関する語（「人の気もちがわかる」など）も多くみられた。また、これはP・Nの両領域において認められた傾向である。高校生では、特性の表現が多様になるとともに、情動の統制を表す語（「感情を出してしまう」「内に溜める」など）が小・中学生よりも増大している点が特徴的であった。

また、「友だちに好かれる」ところが長所であるという反応や、逆に「友だちに嫌われる人」にはなりたくない、という反応もみられた。文章完成法という方法を用いたためかもしれないが、現代の子どもたちは、自分の長所や短所について「友だちが認めてくれるのはどんな自分か」という視点から判断する傾向が強いのではないと思われる。

両価的な反応の中にも、現代の子どもたちの特徴が示されたように思われる。加藤・高木（1980）や長島他（1967）では、「クール（冷たい）」は「暖かい」と対になって情動の安定性を示す因子に含まれているが、現代の子どもにとっては、むしろポジティブな特性として捉えられている。同様に、「まじめ」という特性は誠実性を示す特性とされているが、本研究では、望ましくない方向で捉えられる場合もあることが明らかとなった。千石（1991）は、1970年代後半から「まじめ」の価値が崩れ、勉強のできる子は利己的でガリ勉・「マジ」と軽蔑されるようになり、クラスの人気者として支持されなくなったと述べている。本研究の結果からは、両価的であったため「まじめ」の価値が失われたとは言えないが、千石（1991）の知見と異なるのは、現在の小・中・高校生は、「まじめ」と学習成績とを対応するものとしては捉えていないという点である。「勉強ができ、かつおもしろく、はきはきしている」。そんな器用なイメージを「こうなりたい」自己像として回答した子どもも少なくなかった。

また、それとは別の観点から注目される両価的な項目もあった。たとえば、「自分の気に入らないところ」として「人に気をつかうところ」を挙げていながら、「友だちのいいところ」としても同様の特性を挙げている場合である。自分ほもっと楽に他者

Table 2-1 小・中学生のポジティブ特性についての質問文に対する回答

番号	特性	出現頻度	番号	特性	出現頻度	番号	特性	出現頻度	番号	特性	出現頻度
1	◎ 明るい	73	31	◎ 強い	32	61	落ち着きがある	27	91	◎ おだやか	26
2	楽しい	43	32	堂々としている	24	62	△ まじめ	17	92	気が長い	20
3	元気がいい	26	33	まわりの人に左右されない	21	63	おとなっぽい	6	93	ところが広い	18
4	みんなに好かれる	10	34	何があっても気にしない	4	64	後のことを考える	4	94	△ おとなしい	17
5	素直	10	35	心が強い	1	65	レベルが高い	1	95	おこらない	16
6	人気者	6	36	◎ スポーツがとくい	38	66	◎ 思いやりのある	47	96	△ 突って済ませられる	5
7	みんなの中心	4	37	足がはやい	26	67	相手を思いやる	21	97	静か	4
8	にこにこしている	3	38	運動ができる	15	68	相手のことを考える	17	98	待っていてくれる	1
9	遊びが楽しい	1	39	サッカーがとくい	9	69	気配りができる	14	99	平和主義	1
10	◎ だれとでも仲良くなれる	30	40	マラソンが速い	4	70	△ 人に気をつかう	13	100	△ 冷静	28
11	だれとでも仲良くできる	22	41	◎ かわいい	31	71	気遣いができる	9	101	△ クール	17
12	話しかけやすい	15	42	◎ かっこいい	24	72	安心できる	7	102	きっぱりしている	15
13	◎ だれとでも話す	7	43	顔がいい	16	73	気がつかけてくれる	7	103	しつこくない	9
14	△ 愛想が良い	5	44	顔がかわいい	6	74	◎ 人のきもちがわかる	41	104	べたべたしない	2
15	◎ おもしろい	43	45	目がきれい	1	75	やさしい	17	105	△ おおざっぱである	17
16	友だちに好かれる	24	46	◎ 自信がある	38	76	人のことを考える	19	106	気前がいい	10
17	ユーモアがある	9	47	自信家である	13	77	人を傷つけない	17	107	△ 気まくれ	5
18	みんなを盛りあげる	5	48	人に頼らない	10	78	友だちおもしろい	17	108	△ お天気やさん	1
19	ムードメーカー	3	49	自分の考えがある	9	79	人の気持ちに気づく	12	109	思い切り泣ける勇気がある	1
20	◎ はきはきしている	41	50	◎ 頼りになる	42	80	困ったときに助ける	10	110	絵がうまい	1
21	はっきりしている	22	51	責任感がつよい	35	81	人に必要とされる	8	111	家庭的	1
22	言いたいことが言える	10	52	しつかりしている	21	82	人をほげますことができる	4	112	気楽	1
23	何でもはっきりいう	7	53	てきぱきしている	16	83	困っている人を助ける	3	113	けんかがつよい	1
24	自分を出せる	6	54	◎ 親切	16	84	◎ がんばりや	37	114	想像力がある	1
25	くよくよしない	44	55	頼りがある	15	85	いつも一生懸命	24	115	自分を大切にする	1
26	◎ 前向き	35	56	気が利く	11	86	努力する	23	116	ピアノがうまい	1
27	うけもちがある	29	57	頼まれるとイヤと言わない	3	87	どんなことも一生懸命	20	117	何かを貸してくれる	1
28	さばさばしている	22	58	◎ 頭がいい	48	88	根性がある	18	118	ふざける	1
29	積極的	24	59	成績がいい	37	89	ねばりづよい	17			
30	生き生きしている	4	60	勉強ができる	29	90	負けず嫌い	14			

Table 2-2 高校生のポジティブ特性についての質問文に対する回答

番号	特性	出現頻度	番号	特性	出現頻度	番号	特性	出現頻度	番号	特性	出現頻度
1	◎ 明るい	132	44	切り替えが早い	4	87	かっこいい	17	130	最後までやりとす	3
2	楽しい	72	45	立ち直りが早い	3	88	キレイ	8	131	物事をやりとげる	2
3	元気がいい	12	46	嫌なことはすぐ忘れられる	2	89	細い	7	132	地道な	1
4	いつも笑顔	7	47	めげない	1	90	美人	4	133	正直	8
5	朗らか	3	48	何があっても気にしない	1	91	◎ 思いやりのある	35	134	素直	6
6	◎ だれとでも仲良くできる	26	49	泣かない	1	92	相手のことを考える	14	135	ありのままを出せる	5
7	分け隔てない	14	50	◎ しつかりしている	22	93	△ 気配りができる	12	136	自分に正直な	3
8	人の好き嫌いが少ない	10	51	責任感がある	18	94	△ 気遣う	2	137	自分らしい	3
9	人付き合いがいい	3	52	決断力がある	5	95	協力できる	1	138	人に隠し事をしない	1
10	友だちが多い	2	53	頼りになる	4	96	やさしい	20	139	マイペース	9
11	人を嫌わない	2	54	義務をはずす	3	97	気が長い	5	140	△ 天然	4
12	△ 愛想がいい	2	55	判断力がある	3	98	怒らない	3	141	のんびりや	3
13	◎ 知らぬ人として仲良くできる	1	56	よく考えて行動する	3	99	△ 大雑把な	2	142	△ ぼけっとうしている	2
14	フレンドリー	1	57	実行力がある	2	100	親切な	9	143	スポーツができる／万能	4
15	人気がある	14	58	きびきびしている	1	101	気が利く	7	144	サッカーがとくい	3
16	有名な	3	59	◎ 自信を持った	19	102	人の役に立つ	4	145	体力がある	3
17	スター性がある	1	60	自分に自信がある	6	103	◎ 世話好きな	3	146	体を動かすのが得意	1
18	◎ おもしろい	113	61	自信家である	3	104	人のためにいろいろする	1	147	ダンスがうまい	1
19	ささやかな／気楽な	19	62	強い	25	105	ところが広い／寛大な	35	148	パレーがうまい	1
20	話がうまい	5	63	△ 負けず嫌い	9	106	大きな／大きな人間	20	149	おしとやかな	4
21	まわりを明るくする	4	64	△ 気が強い	2	107	おおらか	6	150	奥ゆかしい	2
22	気が利いた話ができる	3	65	落ちついた	12	108	おだやか	3	151	手先が器用	2
23	にぎやか	3	66	△ 冷静	9	109	器が大きい	3	152	ドラムがうまい	1
24	ノリがいい	2	67	大人な	8	110	心にゆとりがある	2	153	歌がうまい	1
25	テンションが高い	2	68	△ 感情を表にださない	2	111	包容力がある	2	154	ピアノがひける	1
26	ハイである	1	69	不利益なことをしない	1	112	◎ 余裕のある	2	155	本を読むのがはやい	1
27	人気がある	14	70	人に頼らない	5	113	小さいことをウダウダ言わない	1	156	本が好き	1
28	有名な	3	71	堂々としている	4	114	人の気持ちかわかる	22	157	多趣味な	1
29	スター性がある	1	72	自分に厳しい	3	115	人のことを考える	9	158	幸せな	4
30	◎ はきはきしている	24	73	挑戦する	2	116	他人の苦しみかわかる	4	159	△ お人よし	2
31	意見を言える	18	74	自主的	1	117	話しやすい	17	160	自由な	2
32	本音をいえる	5	75	◎ 頭がいい	21	118	聞き上手	11	161	謙虚な	1
33	まわりに流されない	12	76	勉強ができる	10	119	人に安心感を与える	10	162	熱心やすい	1
34	まわりに振り回されない	10	77	△ まじめ	6	120	人の相談にする	5	163	世渡り上手	1
35	意志の強い	4	78	勉強熱心	3	121	勇気づける／励ます	2	164	内面も外面もよい	1
36	個性的な	4	79	数学ができる	1	122	人の支えになる	2	165	計画的	1
37	周囲に左右されない	3	80	ワコウ	1	123	人のためにがんばる	1	166	夢のある	1
38	自分の考えをもつ	2	81	理知的	1	124	あきらめない	18	167	節制的	1
39	人とは違った	2	82	◎ かわいい	37	125	がんばりや	13	168	平和主義	1
40	◎ 前向きな	21	83	背が高い	18	126	根性がある	12	169	ふつつ	1
41	楽観的な	9	84	顔がいい	18	127	努力する	11	170	人並みである	1
42	くよくよしない	9	85	男らしい	6	128	何事も一生懸命	7	171	変わっている	1
43	あまり悩まない	5	86	女らしい	5	129	がんばるづよい	5	172	お金もち	1

Table 2-3 小・中学生のネガティブ特性についての質問文に対する回答

番号	特性	出現頻度	番号	特性	出現頻度	番号	特性	出現頻度	番号	特性	出現頻度
1	① 暗い	52	29	⑩ じぶんかって	46	57	調子がいい	17	85	△ クール	8
2	無口	23	30	わがまま	38	58	一言多い	2	86	落ち着き払っている	2
3	自分から話さない	9	31	自己中心的	17	59	いじわる	26	87	△ おおざっぱである	24
4	② ひっこみじあん	46	32	すくしきる	16	60	△ つめたい	18	88	だらしない	5
5	はずかしがゆ	28	33	自分を有利にする	1	61	△ いつも冷静な感じ	13	89	すぐ悪口をいう	21
6	△ おとなしい	26	34	③ うせつき	40	62	すくかつつける	8	90	(人々)差別する	13
7	消極的	21	35	ひきよう	25	63	◎ おこりっぽい	43	91	人に価値をつける	5
8	◎ すくよくよする	42	36	約束を守らない	17	64	短気	36	92	むかつく	21
9	神経質	30	37	ずるがしこい	14	65	すくむかつく	30	93	ふけつ	20
10	すく傷つく	29	38	裏表がある	10	66	すく人をたたく	19	94	しつこい	18
11	心配しすぎる	10	39	△ 誰にでも優しくする	4	67	らんぼう	6	95	素直でない	20
12	気にしやさん	2	40	△ 愛想がいい	3	68	頭が悪い	47	96	先生	17
13	◎ 弱い	34	41	◎ 人の気持ちを考えない	35	69	△ ふまじめ	38	97	生意気	17
14	すく広く	31	42	人のことを考えない	32	70	成績がわるい	30	98	くだらない	12
15	気がよわい	28	43	人の気持ちを傷つける	29	71	◎ 勉強がにがて	21	99	お父さん	11
16	小心者	20	44	相手のことを考えない	27	72	△ まじめ	20	100	けち	10
17	こわがり	6	45	人を傷つける	23	73	◎ すくあきらめる	42	101	いやみ	5
18	◎ 言いたいことが言えない	30	46	友だちにいやがられる	19	74	あきっぽい	21	102	常識がない	4
19	はつきりしない	24	47	人にあたる	11	75	やる気がない	21	103	不器用	4
20	思っていることが言えない	17	48	友だちにさらわれている	8	76	めんどうくさゆ	18	104	人を信じない	3
21	決断力がない	15	49	いばっている	17	77	無責任	16	105	反抗的	3
22	△ 人に気をつかう	11	50	言葉遣いが悪い	10	78	△ 気まぐれ	10	106	総理大臣	2
23	発表できない	10	51	口が悪い	6	79	責任感がない	9	107	不良	1
24	おもしろくない	37	52	◎ すく調子にのる	31	80	なまける	5	108	ものを貸さない	1
25	◎ つまらない	32	53	うるさい	28	81	ふとっている	35	109	言われてもできない	1
26	△ スポーツがにがて	32	54	けじめがない	26	82	◎ かつこわい	30	110	ごわい	1
27	運動ができない	18	55	落ち着きがない	23	83	顔がわるい	21			
28	運動音痴	9	56	おしゃべり	20	84	◎ かわくくない	18			

Table 2-4 高校生のネガティブ特性についての質問文に対する回答

番号	特性	出現頻度	番号	特性	出現頻度	番号	特性	出現頻度	番号	特性	出現頻度
1	◎ わがまま	38	48	△ 八方美人	11	95	思い通りにできない	4	142	落ち着きがない	6
2	自己中心的・自分勝手	12	49	△ ぼんねを言わない	3	96	言いたい事がいえない	4	143	おしゃべり	2
3	人に配慮できない	2	50	頼りうるような	2	97	内に溜める	3	144	△ プライドがない	3
4	◎ 意地っ張り	24	51	異性と話すときに気をつかう	2	98	自分から動けない	2	145	△ いつも笑っている	2
5	ひくれしている	14	52	偽善的	1	99	実行力がない	2	146	△ プライドが高い	3
6	素直でない	12	53	人のあとにくっついてるような	1	100	△ 人に気をつかう	10	147	△ 負けず嫌い	2
7	頑固	9	54	◎ 暗い	19	101	人の顔色をうかがう	8	148	△ 気が強い	2
8	へそ曲がり	3	55	元気が無い	8	102	他人を気にする	6	149	愛想が無い	2
9	◎ 短気	44	56	つまらない	11	103	流されやすい	5	150	太っている	10
10	怒りっぽい	19	57	△ まじめ	5	104	断れない	2	151	音が低い	9
11	いらぬしやすい	2	58	馬鹿ふざげができない	2	105	弱い	5	152	目つきが悪い	8
12	怒るとずすと怒っている	2	59	ふざけない	2	106	心が弱い	2	153	顔が悪い	5
13	すぐ腹が立つ	1	60	ノリが良い	1	107	緊張しやすい	2	154	猫背	2
14	気分や	2	61	話すのが苦手	10	108	あがりやすい	2	155	足が短い	1
15	いじわる	8	62	人と話さない	2	109	不安定	1	156	目が悪い	1
16	人にあたる	2	63	自分の世界にこもっている	1	110	思慮深い	1	157	目が悪い	1
17	△ 感情を出してしまう	6	64	社会的でない	1	111	頭の悪い	22	158	体力が無い	1
18	◎ 人に迷惑をかける	28	65	傷つきやすい	9	112	◎ 勉強がにがて	13	159	ひきよう	8
19	人から嫌われる	17	66	消極的	6	113	勉強ができない	7	160	自信過剰	6
20	相手の欠点を言う	1	67	人見知りする	5	114	勉強しない	2	161	大物ぶる	2
21	人を傷つける	23	68	ひっこみじあん	2	115	勉強がきらい	2	162	自分でありすぎる	1
22	人を悲しませる	23	69	恥ずかしがりや	3	116	◎ やる気がない、無気力な	13	163	協調性がない	2
23	人を困らせる	14	70	人付き合いが下手	1	117	根気が無い	9	164	孤独	1
24	悪口を言う	8	71	勇気が無い	5	118	飽きっぽい	6	165	さみしい	1
25	言葉がきつい	5	72	気が強い	3	119	集中力がない	5	166	儲けない	1
26	言葉なしに話す/思ったことを言う	4	73	小心者	2	120	根性が無い	5	167	非常識な/常識が無い	3
27	口が悪い	2	74	度胸が無い	2	121	努力しない	3	168	モラルのない	2
28	言い過ぎる	2	75	◎ すくよくよする	17	122	面倒くさがり	3	169	素直	1
29	人にひどいことを言う	2	76	◎ 落ち込みやすい	11	123	なまける	2	170	やきもちやき	1
30	欠点しかみない	1	77	人に言われたことを気にしすぎる	2	124	嫌なことをさける	2	171	一言多い	1
31	他人のせいにする	1	78	ささいなことを気にする	2	125	すくあきらめる	1	172	幼稚	2
32	◎ 思いやりのない	28	79	うじうじした	2	126	中途半端な	18	173	せつから	1
33	冷たい	19	80	愚痴っぽい	3	127	◎ いらいらげん	18	174	どじ	1
34	他人の気持ちを考えない	9	81	自信が無い	2	128	だらしない	9	175	普通・平凡	5
35	人の気持ちがわからない	4	82	マイナス思考	7	129	自分に甘い	5	176	平均的	3
36	困っている人をほっておく	3	83	心優しい	5	130	だらける	4	177	地味な人生をおくる	1
37	人のことを考えない	2	84	神経質	3	131	気分転換ができない	2	178	一生をムダに過ごす	1
38	他人の話をおかない	1	85	考えすぎる	3	132	けじめがない	2	179	負け犬	1
39	自分のことしか見えない	1	86	思い悩む	2	133	切り替えが悪い	1	180	犯罪をおかす	1
40	人を見下す/軽蔑する	5	87	悪い方へ考える	2	134	すく考え込む	1	181	下品	1
41	差別する	2	88	少人のことでも気にする	2	135	無責任な	9	182	目立つ	1
42	高圧的である	2	89	◎ 優柔不断	20	136	約束を守らない	3	183	しつこい	4
43	◎ うせつき	21	90	△ 決断力に欠ける	9	137	時間ムードな	3	184	姉のような	2
44	人を裏切る	9	91	人に頼る	5	138	自分に責任がとれない	1	185	父のような	5
45	自分をつくる	6	92	はつきりしない	20	139	言動の不一致	1	186	祖父のような	1
46	猫かぶり	5	93	意見がでない	5	140	うるさい	13	187	不平等に接する	1
47	裏がある	2	94	判断が悪い/遅い/やすい	5	141	すく調子に乗る	7	188	心の狭い	4

と付き合いたいと思うけれども、他者に対しては、自分に優しく親切に接することを求める、自己中心的な価値観が伺える。

このように、現代の子どもたちが価値を置く特性は年代によって異なること、また社会一般に「望ましい」と方向づけられる特性との間にズレがあることが示唆された。子どもの自己概念を扱う場合、これらの点に十分留意することが必要であろう。

【研究2】

1. 目的

以下の4点について検討することを目的とした。

①作成された尺度の因子構造、信頼性と妥当性について検討する。②小学生から高校生を対象にした場合にも、自己概念における質的側面、即ち「ある特性に関する個人にとっての重要性」を考慮することが有意義か否かについて、自尊感情の高さとの関連から検討を行う。③自己概念をP・Nの各側面からとらえ、いずれが自尊感情により強く関わっているのか検討を行う。④現実自己-理想自己間のズレの大きさと自尊感情との関連について検討する。

2. 方法

2001年5月～2002年2月、小学校5年生から高校3年生の男女児童・生徒1526名（Table 3）を対象に、以下の2つの尺度から構成される質問紙票を用いて調査を実施した。

①自己概念

小・中学生に対しては、研究1で作成した小・中学生用自己概念尺度30項目（P・N各領域15項目）を用いた。高校生に対しては、研究1で作成した高校生用自己概念尺度24項目（P・N各領域12項目）を用いた。

現実自己に関しては、P・N各領域とも「あてはまる」～「あてはまらない」までの5件法で回答を求めた。理想自己に関しては、P領域では「どのくらい、『これからそうになりたい』と思いますか」という教示のもと、「ぜひそうになりたい」～「なりたく

ない」までの5件法で回答を求め、N領域では「どのくらい、『これからそうなりたくない』と思いますか」という教示のもと、「絶対なりたくない」～「そうになりたい」までの5件法で回答を求めた。

②自尊感情尺度

山本・松井・山成（1982）が作成したRosenbergのSelf-Esteem Scaleの邦訳版（10項目、5件法）を用いた。

3. 結果と考察

1) 自己概念尺度に関する分析結果

(1) 因子分析

小・中学生用自己概念尺度・高校生用自己概念尺度について、それぞれ因子分析（主因子解→バリマックス回転）を行った。その結果、両尺度ともP・Nの両領域において3因子が抽出された。

小・中学生用自己概念尺度では、P領域第1因子に負荷の高い項目は、「明るい」「おもしろい」など7項目であり「活動性」因子と命名した。同様に第2因子は「かっこいい（かわいい）」など5項目であり、「自信」因子と命名した。第3因子は「人の気持ちがわかる」など3項目であり、「思いやり」因子と命名した。なお、累積寄与率は41.63%であった。次にN領域であるが、第1因子に負荷の高い項目は「暗い」「ひっこみじあん」など7項目であり、「消極性」因子と命名した。同様に第2因子は「自分勝手」など5項目であり「自己中心性」因子と命名した。第3因子は、「勉強が苦手」など3項目であり、「劣等感」因子と命名した。なお、累積寄与率は37.79%であった。さらに、各下位尺度の信頼性を検討するため、各因子に負荷の高い項目からなる下位尺度を構成し、それぞれ α 係数を算出した。以上の結果はTable 4-1, 4-2に示すとおりである。

高校生用自己概念尺度では、P領域第1因子に負荷の高い項目は「明るい」など5項目であり、小・中学生用と同じく「活動性」因子と命名した。同様に第2因子は「しっかりしている」など4項目であり、「自信」因子と命名した。第3因子は「ところが広い」など3項目であり、「思いやり」因子と命名した。なお、累積寄与率は44.42%であった。次にN領域であるが、第1因子に負荷の高い項目は「わがまま」など6項目であり、「自己中心性」因子と命名した。同様に第2因子は「暗い」など3項目については、「低意欲」因子と命名した。なお、累積寄与率は34.80%であった。さらに、各下位尺度の信頼性を検討するため、各因子に負荷の高い項目からなる下位尺度を構成し、それぞれ α 係数を算出した。

Table 3 調査対象児童生徒の学年別、男女別構成

	小学生		中学生			高校生			計
	5年	6年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	
男子	65	38	108	132	126	77	69	72	687
女子	61	37	123	124	129	122	138	105	839
計	126	75	231	256	255	199	207	177	1526

Table 4-1 小・中学生用自己概念尺度ポジティブ領域項目の因子分析結果

項目	抽出因子				評定5の選択率(%)	
	I	II	III	共通性	小	中
I. 活動性 ($\alpha = .82$)						
1 明るい	.788	-.007	.099	.630	62.9	53.9
14 だれとでも仲良くなれる	.634	.155	.246	.486	74.3	52.3
10 おもしろい	.594	.186	.290	.471	45.7	51.0
12 はきはきしている	.530	.464	.122	.512	42.0	46.1
9 前向きである	.487	.302	.105	.340	55.7	58.2
13 強い	.472	.451	.207	.469	56.5	58.3
3 スポーツがとくい	.377	.344	.186	.295	77.1	60.2
II. 自信 ($\alpha = .74$)						
6 カッコいい(かわいい)	.177	.604	.186	.430	44.3	50.8
11 自分に自信がある	.355	.575	.103	.468	49.6	53.1
7 たよりになる	.243	.557	.417	.544	48.6	48.9
8 頭がいい	-.048	.500	.331	.362	56.3	64.8
III. 思いやり ($\alpha = .66$)						
2 思いやりのある	.198	.075	.614	.421	54.3	48.7
4 人のきもちがわかる	.212	.150	.546	.365	61.4	49.8
5 がんばりや	.231	.211	.393	.252	55.7	58.2
15 おだやか	.029	.213	.390	.198	44.3	46.5
因子負荷量2乗和	5.28	2.06	1.57			
寄与率(%)	17.44	13.74	10.45			

Table 4-2 小・中学生用自己概念尺度ネガティブ領域項目の因子分析結果

項目	抽出因子				評定5の選択率(%)	
	I	II	III	共通性	小	中
I. 消極性 ($\alpha = .79$)						
6 暗い	.683	.128	-.205	.525	64.3	63.7
11 ひっこみじあん	.682	.103	.117	.489	48.6	49.9
9 すぐよくよする	.632	.160	.186	.460	62.9	53.5
10 よわい	.620	.164	.173	.440	48.3	59.9
13 言いたいことが言えない	.613	.024	.246	.437	51.4	46.4
15 つまらない	.437	.259	.211	.303	52.9	58.8
1 スポーツがにがて	.409	.141	.078	.193	55.7	56.0
II. 自己中心性 ($\alpha = .73$)						
2 じぶんかって	.140	.683	.179	.518	61.4	61.4
3 うそつき	.186	.636	-.002	.439	65.7	59.2
4 人の気もちを考えない	.149	.583	-.032	.363	55.7	62.9
7 すぐ調子にのる	.091	.494	.221	.301	42.9	48.4
5 おこりっぽい	.077	.450	.198	.248	52.9	47.3
III. 劣等感 ($\alpha = .57$)						
12 勉強がにがて	.110	.103	.591	.372	41.4	53.9
14 すぐあきらめる	.336	.219	.402	.323	58.6	55.2
8 かつこわるい(かわいくない)	.250	.233	.366	.251	43.9	46.8
因子負荷量2乗和	4.47	1.79	1.20			
寄与率(%)	18.51	12.91	6.33			

以上の結果は Table 4-3, 4-4に示すとおりである。若干 α 係数の低いものがみられたが, P, N 領域ともに, 各下位尺度に含まれる項目数のばらつきが影響を及ぼしたのではないかと考えられる。

なお, 小・中学生用自己概念尺度については, 妥当性を検討するため, 2001年5月, 中学1~3年の男女生徒217名(男子109名, 女子108名)を対象に, 自己概念尺度およびY-Gテストの「社会的外向性(S)」, SAIの下位尺度「自己承認」(宮沢, 1988), 情緒的共感性尺度(Davis, 1983)を用いて調査を実施した。まずP領域「活動性(M=20.79, SD=5.52)」とY-G「社会的外向(M=17.87, SD=4.22)」との相関係数を算出したところ, $r=.59$ であった。同様に, 「自信(M=12.25, SD=3.76)」と「自己承認(M=19.51, SD=5.04)」とは $r=.40$, 「思いやり(M=8.72, SD=2.23)」と「情緒的共感性(M=22.57, SD=4.42)」とは $r=.39$ であった。また, N領域「消極性(M=16.37, SD=4.76)」と「社会的外向」との相関は $r=-.48$ であった。「劣等感(M=12.73, SD=3.16)」と「自己承認」とは $r=-.43$, 「自己中心性(M=14.87, SD=3.86)」と「情緒的共感性」とは $r=-.37$ であった。以上の結果から, 小・中学生用自己概念尺度については, 妥当性の一部が確認されたと考えられる。

最後に, 理想自己の各項目に対する回答で, 被験者が評定値5(P領域では「ぜひそうになりたい」, N領域では「絶対そうなりたくない」)を選択した割合(%)を, 学校段階ごとに算出した。その結果は Table 4-1~4-4の右端「選択率」に示すとおりである。

(2) 男女・各学校段階別の平均値の算出と, 性差の分析

P・N各領域の現実自己の平均値(以下PR・NR)と, 現実自己と理想自己のズレの得点(以下PD・ND)を算出した。その際, 遠藤(1992)を参考に, 理想自己評定で各被験者が評定値5をつけた項目を重要特性, 4以下の項目を非重要特性とみなし, 以下の方法で算出した。①重要特性を用いたPR(以下PRa)は, $\sum ra^2/na$ の平方根(raは各個人の重要特性の現実自己得点, naは重要特性の項目数)を算出した。②重要特性を用いたPD(以下PDa)は, $\sum da^2/na$ の平方根(daは各項目における両自己の差異)を算出した。③非重要特性を用いたPR(以下PRb)は, $\sum rb^2/nb$ の平方根(rbは各個人の非重要特性の現実自己得点, nbは非重要特性の項目数)を算出した。④非重要特性を用いたPD(以下PDb)は, $\sum db^2/nb$ の平方根(dbは各項目における両自己の差異)を算出した。なお, 重要特性を用いた

NR・ND(以下NRa・NDa), 非重要特性を用いたNR・ND(以下NRb, NDb)についても, 同様の方法で算出した。次に, P・N各領域における理想自己の平均値(以下PI・NI)を算出した。小・中・高校別の各得点の平均値とSDは, Table 5に示すとおりである。そして最後に, 算出した各得点の平均値に男女で差があるか検討するため, 学校段階ごとt検定を行った(Table 5)。

その結果, 小学生では, PIのみ女子のほうが男子よりも高かったが, 他の平均値には差が見られなかった。中学生では, 各領域とも理想自己の平均値はすべて女子が男子を上回っており, 一般に女子のほうが男子よりも「こうになりたい(あるいはこうなりたくない)」との理想像を高く抱えていることが示された。この点は高校生でも共通にみられたが, 現実-理想のズレ得点については, 男女差の特徴が中・高で多少異なっていた。中学生の結果で特徴的であるのは, P領域において, 特性が自分にとって重要か重要でないかに関わらず, 女子は男子より現実と理想自己の差が大きいと認知している点である。

一方, 高校生の場合, P・N各領域とも, 個人にとって重要な特性を考慮した場合, ズレ得点には男女間に差がみられなかった。本研究では, 小・中学生と高校生とで異なる自己概念尺度を用いているため, 各学校段階間で平均値を比較することはできない。だが, これらの結果から, 中学生と比較して高校生では「何が自分にとって重要な特性なのか」がより明確になってくるのではないかと考えられる。

2) 自己概念と自尊感情との関連

(1) 自尊感情得点の算出

本研究で用いた自尊感情尺度は, 尺度構成が大学生を対象として行われている。本研究では児童・生徒を対象としたため, 因子分析(主因子解→バリマックス回転)を行い, 尺度の因子構造を確認した。その結果, いずれの学校段階でも, 項目8「もっと自分を尊敬できるようになりたい」の共通性および因子負荷量が小さかった。そのためこの項目を除外し, 残った9項目の合計得点を「自尊感情」得点とした。

次に, 自尊感情得点を従属変数とし, 性と学年を要因とする分散分析を行った。その結果, 性差がみられ($F[1/1523]=5.77, p<.05$), 男子(M=28.31, SD=6.34)の方が女子(M=27.23, SD=5.82)よりも高かった。学校段階の主効果および交互作用はみられなかった。

Table 4-3 高校生用自己概念尺度ポジティブ領域項目の因子分析結果

項目	抽出因子			共通性	選択率 (%)
	I	II	III		
I. 活動性 ($\alpha = .77$)					
1 明るい	.785	.008	.136	.635	54.4
8 だれとでも仲良くできる	.597	.145	.217	.424	59.9
10 おもしろい	.581	.155	.278	.439	50.9
11 はきはきしている	.554	.433	.035	.496	50.0
3 前向きである	.391	.327	.150	.282	63.6
II. 自信 ($\alpha = .73$)					
6 しっかりしている	.138	.645	.166	.462	57.1
9 自信をもっている	.302	.591	.123	.455	51.0
7 頭がいい	-.019	.581	.212	.382	62.5
5 カッコいい(かわいい)	.183	.538	.247	.384	59.8
III. 思いやり ($\alpha = .69$)					
2 思いやりのある	.154	.159	.707	.548	66.8
12 ところが広い	.236	.219	.613	.479	58.5
4 人のきもちがわかる	.185	.294	.471	.343	59.5
因子負荷量2乗和	4.30	1.45	1.16		
寄与率 (%)	31.25	7.80	5.37		

Table 4-4 高校生用自己概念尺度ネガティブ領域項目の因子分析結果

項目	抽出因子			共通性	選択率 (%)
	I	II	III		
I. 自己中心性 ($\alpha = .74$)					
1 わがまま	.672	.043	.178	.486	52.8
8 いじっぱり	.552	.180	.066	.342	46.4
4 短気	.541	.079	.044	.301	45.3
7 人に迷惑をかける	.468	.237	.284	.356	59.8
3 思いやりのない	.432	.371	.153	.347	63.8
2 うそつき	.326	.325	.191	.249	53.8
II. 消極性 ($\alpha = .59$)					
5 暗い	.045	.709	.020	.506	61.7
9 すぐくよくよする	.206	.445	.151	.263	56.9
6 優柔不断	.165	.312	.233	.179	52.4
III. 低意欲 ($\alpha = .62$)					
11 勉強ががて	.094	-.042	.567	.332	49.0
10 やる気がない	.064	.299	.563	.410	57.6
12 いいかげん	.240	.251	.533	.405	54.8
因子負荷量2乗和	3.52	1.32	1.19		
寄与率 (%)	23.97	5.89	4.93		

Table 5 各自己概念得点の学校段階別・男女別の平均値とt検定結果

	小学生(201)			中学生(742)			高校生(583)		
	男(103)	女(98)	t	男(366)	女(376)	t	男(80)	女(77)	t
PRa	3.64 (0.77)	3.26 (0.73)	2.01 n.s.	2.91 (0.93)	2.82 (0.78)	1.28 n.s.	3.07 (0.84)	3.02 (0.71)	1.11 n.s.
PRb	2.71 (0.56)	2.76 (0.72)	-0.29 n.s.	2.61 (0.71)	2.66 (0.62)	-0.94 n.s.	2.67 (0.68)	2.71 (0.68)	-0.86 n.s.
NRa	3.41 (0.79)	3.22 (0.88)	0.92 n.s.	3.32 (0.93)	3.17 (0.78)	2.19 *	3.27 (0.93)	3.28 (0.82)	0.56 n.s.
NRb	3.03 (0.67)	2.73 (0.77)	1.61 n.s.	2.76 (0.64)	2.74 (0.63)	0.42 n.s.	2.72 (0.65)	2.67 (0.62)	1.59 n.s.
PI	4.12 (0.54)	4.39 (0.45)	-2.30 *	3.97 (0.72)	4.25 (0.54)	-5.87 ***	4.14 (0.70)	4.46 (0.55)	-6.75 ***
NI	4.22 (0.49)	4.13 (0.81)	0.52 n.s.	4.17 (0.72)	4.34 (0.57)	-3.67 ***	4.15 (0.68)	4.36 (0.48)	-5.58 ***
PDa	1.62 (0.77)	1.99 (0.74)	-1.94 n.s.	2.01 (0.95)	2.25 (0.76)	-3.68 ***	2.14 (0.79)	2.17 (0.69)	-0.78 n.s.
PDb	1.15 (0.44)	1.24 (0.59)	-0.67 n.s.	1.10 (0.60)	1.30 (0.56)	-4.30 ***	1.16 (0.57)	1.27 (0.58)	-2.13 *
NDa	1.97 (0.74)	2.11 (0.87)	-0.69 n.s.	1.98 (0.89)	2.11 (0.74)	-1.99 n.s.	1.97 (0.93)	1.96 (0.82)	-0.45 n.s.
NDb	1.52 (0.72)	1.27 (0.78)	1.30 n.s.	1.22 (0.64)	1.30 (0.52)	-1.84 n.s.	1.27 (0.59)	1.42 (0.52)	-3.24 ***

(括弧内は標準偏差)

* p<.05

** p<.01

*** p<.001

(2) P・N各領域における重要・非重要特性と、自尊感情との関連

P・N各領域の現実自己とズレ得点を算出する際、重要特性を考慮することが有意かどうかを検討するため、4つの現実自己得点 (PRa・PRb, NRa・NRb), また4つのズレ得点 (PDa・PDb, NDa・NDb) と自尊感情との相関係数を、学校段階・男女別に算出した。その結果、重要特性を用いて算出したもの (PRa・NRa, PDa・NDa) については、すべて自尊感情との間に有意な相関が見られた。それに対して、非重要特性を用いて算出したNDbでは、有意な相関係数は得られなかった。同様に非重要特性を用いて算出したPRb・NRb, PDbでは、自尊感情との相関係数が有意であったものがいくつかみられた。そのため、重要特性からなる各自己概念得点と自尊感情との間の相関係数と、非重要特性からなる得点と自尊感情との相関係数との間に有意な差があるかについて、Hotellingの式を用いてペアごとにt検定を行った。その結果、重要特性を用いて算出したPRa・NRa・PDaと自尊感情との相関係数の方が、PRb・NRb・PDbとの相関係数よりも有意に大きいことが明らかとなった。これらの分析結果については、Table 6に示すとおりである。

相関分析の結果から、すべての学校段階において、重視している特性を当人がどのくらい肯定できているかが、自尊心の程度により強く関わっていることが明らかになった。小学高学年生の段階で、すでに自分にとって重要な意味をもつ特性が意識されていると考えられる。子どもの自己概念を扱う際には、特性の望ましさの方向 (ポジティブ・ネガティブ) には関係なく、個人レベルでの重要性を考慮することが有意であると言えるであろう。

また、P・N領域を比較すると、学校段階に関わらず、N領域のほうが重要特性と非重要特性との違いが明確に意識されていると考えられる。では、どちらの特性がより自尊感情に影響を及ぼしているのだろうか。この点について検討するため、学校段階ごと、PDa・PDb, NDa・NDbの4つのズレ得点を説明変数とし、自尊感情を基準変数として重回帰分析を行った。その結果、小学生では、PDaの β (標準偏回帰係数) のみが有意であった (Table 7)。高校生でも、PDaが自尊感情に大きな影響を及ぼしていることが示された。これらの年齢層では、自分が理想像として価値をおく「良いところ」を積極的に肯定できることが、自尊感情の高さと結びついていると考えられよう。彼らの自尊感情を支え、高めるた

Table 6 学校段階別・男女別の各自己概念得点と自尊感情との相関関係

	小学生			中学生			高校生		
	男	女	全体	男	女	全体	男	女	全体
現実自己	PRa	.74 **	.61 **	.67 **	.56 **	.44 **	.51 **	.55 **	.51 **
	PRb	.41 **	.20 **	.37 **	.37 **	.28 **	.32 **	.39 **	.28 **
	t	2.30 **	2.20 *	2.64 **	3.33 **	2.41 *	4.24 **	2.30 *	4.57 **
ズレ	NRa	.51 **	.40 **	.46 **	.58 **	.49 **	.54 **	.36 **	.50 **
	NRb	-.09	.18	.14	.36 **	.14	.25 **	.18	.09
	t	-	-	-	4.14 **	-	6.79 **	-	-
ズレ	PDa	-.78 **	-.58 **	-.69 **	-.33 **	-.46 **	-.40 **	-.44 **	-.50 **
	PDb	-.51 **	-.04	-.27 **	-.10	-.32 **	-.22 **	-.25 **	-.29 **
	t	2.24 *	-	3.64 **	-	2.21 *	3.68 **	2.25 *	3.86 **
ズレ	NDa	-.45 **	-.34 **	-.39 **	-.54 **	-.48 **	-.52 **	-.33 **	-.42 **
	NDb	-.17	.08	-.02	-.06	-.14	-.11	-.08	-.06

* p<.05 ** p<.01

めには、まず当人がどんなポジティブ特性に価値をおいているのかを捉え、その上で、その特性を育て承認していく関わりが有効であると思われる。

それに対して中学生では、P・N各領域とも重要特性から算出したズレ得点の β が有意であり、ややNDaの β のほうが大きかった。小学生・高校生と同様に、中学生においても、自分で自分の良いところを認められることが、自分を価値ある人間として捉えるために重要であると言える。そして、「なりたくない」自分になっていないことが、自尊感情を支えるより大きな要因であることは、中学生にのみ見られた特徴である。現実自己の得点が中学生で低くなっていることを考え合わせると、中学生という年齢層は、自分のネガティブな特性（その中でも、自分にとって意味のある、重要な特性）に敏感になる時期なのではないかと考えられる。万能感が失われ、自分の未熟さや至らなさに過剰に注目してしまうのかもしれない。中学生に対して、ネガティブな特性に関わる不用意なアプローチをすることは、彼らの自尊感情を大きく傷つけてしまうおそれがある。そうした危険を避けるためにも、「重要な特性」の個人差に注目することが必要であろう。

(3) ズレの大きさと自尊感情との関連

現実自己と理想自己のズレの大きさによって、自尊感情に違いがあるか否かについて検討を行った。上記の結果を踏まえ、個人にとっての重要性を考慮した得点であるPDa・NDaを用い、被験者を学校段階ごとに一致群・中間群・ズレ群の3群に分類した。その際、PDaについては、性の影響を除くため男女ごとに群分けを行った。

P領域の一致群とは、現在の自分が「こうなりた

Table 7 各ズレ得点と自尊感情間の重回帰分析結果

説明変数	基準変数	自尊感情 (β)		
		小	中	高
重要	PDa	-.633 ***	-.222 ***	-.414 ***
	NDa	-.121	-.354 ***	-.181 **
非重要	PDb	-.054	-.025	-.155 *
	NDb	-.003	-.068	.016
R(重相関係数)		.69	.54	.57

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

い自分」により近い位置にあると認知している群であり、逆に、ズレ群とは現在の自分が「こうなりたくない自分」からより遠い位置にある群である。またN領域の一致群とは、現在の自分が「こうなりたくない自分」に近い位置にあると認知している群であり、ズレ群とは現在の自分が「こうなりたくない自分」からより遠い位置にあると認知している群である。

以上のように被験者を分類した後、3群間の自尊感情の平均値の差を検討するため、学校段階ごとに要因の分散分析を行った。その結果、すべての学校段階で群間に有意な差がみられた (Table 8)。そのため多重比較を行ったところ、P領域では、小・中・高校生とも、一致群の平均値が中間群よりも高く、また中間群の平均値がズレ群よりも大きかった。N領域では、小学生の一致群と中間群がズレ群よりも自尊感情が低いことが明らかとなった。中・高校生では、一致群が中間群よりも低く、中間群はズレ群よりも低いことが明らかとなった。以上の結

Table 8 各群の自尊感情の平均値と分散分析結果

		一致群	中間群	ズレ群	F-Value
小	N	60	67	69	23.64 ***
	PDa 平均	32.81	26.23	22.88	一致>中間>ズレ
	SD	(5.26)	(4.77)	(3.20)	
	N	64	68	61	6.51 **
	NDa 平均	23.47	28.19	29.71	一致・中間<ズレ
	SD	(6.42)	(4.97)	(5.82)	
中	N	239	249	231	86.55 ***
	PDa 平均	30.67	28.57	23.60	一致>中間>ズレ
	SD	(6.09)	(5.73)	(5.49)	
	N	230	241	224	94.08 ***
	NDa 平均	23.94	27.43	31.74	一致<中間<ズレ
	SD	(6.27)	(4.97)	(5.81)	
高	N	185	192	179	104.64 ***
	PDa 平均	31.81	27.86	23.97	一致>中間>ズレ
	SD	(4.88)	(4.55)	(5.57)	
	N	183	210	178	63.16 ***
	NDa 平均	24.23	28.62	30.29	一致<中間<ズレ
	SD	(5.58)	(5.25)	(4.55)	

* p<.05

** p<.01

*** p<.001

果から、「なりたい自分」に現実自己が近いほど、また「なりたくない自分」から現実自己が遠いほど、自尊感情が高いことが示された。Rogersの仮説に関する徳田(1961)らの見解は、本研究においては支持されなかった。思春期にある子どもを対象にした場合でも、現実と理想のズレの大きさは自尊感情を規定する要因となると考えられる。ここで重要なのは、自尊感情の程度を左右するズレとは、その子どもにとって「価値のある特性」におけるズレだということである。

思春期の子どもの価値観は、彼らを取り巻く環境—学校や家庭—から、少なからず影響を受けている。友だちや教師、両親との関わりのなかで、現在の自己像について自分なりに評価し、理想の自己像を抱くようになる。理想の自己像を持つということは、現実自己に対する批判、拒否、満足、受容などの感情や価値判断を持つことであり(柏木, 1983)、そうした感情が、理想の自己に近づこうとする原動力となるのかもしれない。周囲の人間がその力を支え、子どもたちの自尊感情を高めるためには、まず、目の前の子ども自身が「望ましい」と思う特性の方向と、社会一般で考えられている望ましさの方向が、果たして同じ向きであるのかを問い直す必要があるだろう。そのうえで、その子どもがどんな特性に価値を見出しているのかを捉え、その子らしい特性が生きるように関わることが重要なのではない

だろう。そうした関わりの繰り返しが、ズレを小さくし、子どもの自尊感情を高め維持する鍵となると思われる。

引用文献

- Block, J. & Thomas, H. 1955 Is satisfaction with self a measure of adjustment? *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 51, 254-259.
- Davis, M.H. 1983 Measuring individual differences in empathy: Evidence for a Multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 113-126.
- 遠藤由美 1987 特性情報の処理における理想自己 心理学研究, 58, 289-294.
- 遠藤由美 1991 理想自己に関する最近の研究動向 上越教育大学研究紀要, 10(2), 19-36.
- 遠藤由美 1992a 自己認知と自己評価の関係 教育心理学研究, 40, 157-163.
- 遠藤由美 1992b 自己評価基準としての負の理想自己 心理学研究, 63, 214-217.
- 榎本博明 1998 「自己」の心理学 自分探しへの誘い サイエンス社
- Hoge, D.R. & McCarthy, J.D. 1983 Issues of validity and Reliability in the use of real-ideal discrepancy scores to measure self-regard. *Personality*

- and Social psychology*, 44, 1048-1055.
- 柏木恵子 1983 子どもの「自己」の発達 東京大学出版会
- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における自己概念の特質と発達傾向 心理学研究, 51, 279-282.
- 桑原知子 1991 人格の二面性について 風間書房
- 宮沢秀次 1988 女子中学生の自己受容性に関する縦断的研究 教育心理学研究, 36, 258-263.
- Moretti, M.M. & Higgins, E.T. 1990 Relating self-discrepancy to self-esteem: The contribution of discrepancy beyond actual-self ratings. *Journal of Experimental Social Psychology*, 26, 108-123.
- 長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎 1967 自我と適応の関係についての研究(2) 東京教育大学教育学部紀要, 13, 59-83.
- Rogers, C.R. 1951 Chap. 4 Psychotherapy and personality. VOLUME III A current view of client-centered therapy.
- 千石 保 1991 「まじめ」の崩壊：平成日本の若者たち サイマル出版会
- 高垣忠一郎 1999 心の浮輪のさがし方—子ども再生の心理学 柏書房
- 徳田安俊 1961 小・中学生の自己概念と適応との関係 福島大学教育研究所所報, 24, 24-29.
- 渡邊淑美・長谷川浩一 1972 登校拒否児の自己像に関する一研究 教育心理学会第14回総会発表論文集, 52-53.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

(受稿9月30日：受理11月13日)

謝辞)

本論文の作成にあたり、多くの先生方、児童・生徒の皆様に協力していただきました。深く感謝申し上げます。